繪本豐臣勲功記

九編

千

へ遺13
2209
90上

特
門へ遠13
号2209
巻 90上

繪本豐臣勲功記九編卷之拾

目録

秀吉公奮懐建立大佛殿
附真山助材
後陽成院行幸于聚楽亭
附和歌歓遊

巻公令設大業舎於小野

附 業信風諫

巻関白南紀快活感上下

附 賜金法侯

絵本豊臣勲功記九編巻之拾

櫻澤堂山 刪補

秀吉公喬壊建立大佛殿 屬 真山助材

中井積善曰豊開白非意愚佞佛者但其志既滿務欲為所不能為以眩耀天下後世故舉動往々如是と然らざるべ天あり。下ふ神仙あり。迄四の物。人力の迫ざる緯。百ふ万倍超るセり。大材巨識の老々公ふお ひてぃづくんぞ志を識らざ〳〵ん乎。然きバ往時義若ふく在セ〳〵始発。三方面の戸河伽羅翻天を紛碎セ〳〵。罷を続ちんとめふ。鶴立するとゝ流涙あり。其も名狂として来るふ冥らぜ。此ハ幼年の古学ふ。莨津

光明寺の本尊を安懐ちぬ。縦令壹載の云んあるを
もせよ。実に又逆罪に幾りれば。此大罪を贖はんと
結搆ふべきなる。當比は世尊屋下要乐の城に在しまし
て。大佛殿を建創せんと懐在祀せしに。其昔第田治
若院を以。浅聖深広女猶婚田古清に附。石田治弘女補。
出来大罪を補の又を引き点へ令場らを大壹建立地
形の場を東山佛光ちとぞ。決微せらる。往古よりの
灰規に遇りて。壹ちの高勢二十丈。佛像の四長十六
丈。今更塔減あるりしとぞ。這像まふいち光嚴祝法方
廣佛の殊おそとべ。其所縁とりく。精舎の馬を方廣
寺とぞ称呼きべる。叡いに大塔ちの古溪和尚と清迎

して。往昔さらきめんと懐憶しぐ。成就のまぐをに遷化
ある。是ふよりて聖優院の乃滅をして。列尚徹とし
まふとぞ。然やどに佛像とも往昔のおとく。虎洞とも
て待立んとセバ。大結搆ふして建成きぐさし。如何に
やハせんと。世人ふも思惑に惑ませ給ふ撥会世后ふに
震旦の佛工ある者。在りるよしを所しめされ。いそぎ
京美に召せ。大仏造立の縛をして。弾細に同をセ
給ふ。仏工情で答て曰く。开も美ふく。大仏像を造
らんとセバ。本像ふして。其外面を漆摩りて塗箔ぬを
べ。一百年ハ持得るもと。世人固くいありと云伏す。
世人ふ作召され。いろある尚理に稀ふく鮮と

て。邦地其義ふ伝セさるひ。仏造磯家矢兄弟ふ命ゼら
る。末とゐて仏像を造らしむるふ。其趣体ハ漆膠を
ゐく塗固め。表彩を彩色をべき繹ふぞ畢竟ゐる。時
ふ多侍ひの汲とゝて。ち西籠後る。ふ川主馬氏。元桐東
市正。古田名弱女捕。稲屋門稲正間清表右弟と清安
る。佐坂殻を雲んとゝ。家紀野尾の浦くふ人技を
純て。据きセ志むまど。一万信といふ矢ふゝあまべ。客
易ふ潤雲きべふとも懐一ぜ。左右ゝて仏像大梁成
出セゝゝべ。下地塗ふぞ数ゐる。新ふ南的淡海ふ
ち山の程里ふ。世を通きる奥山といふ汝つありる。
堂塔造立きるの切猪。最廣志ある繹を伝念ゝて。十

寿ぞうる年。紀の家の呼の峯ふ投て。大仏菩薩株
数多営立るの切号ふ。秀出善信の乃ふ組織ある風写
むりれば。考志岡斯至るを昭来され。後ふハ是を大
仏建立の孤主と志ゝ面ふ。此汝つ頑てより。此るを懐
ち引る如あをべ。欲赤躍ふ耐へぜ。大仏の垣内ふ草
菴を結び。年日の記君組とさざめ。憲皆のるふ軒痛宜
下知志引れば。潤作迷成の切号塔かも。加之号堂の下
法子輩を率来りて。子宝の如くふ奉走きさしむ。元
来此下法ふハ後来新ふ有大仏菩の造作ふ別て。捕力
の便宜ある繹多あり引る。其ゞ中ある書の東西ふ
大ひある。假山を築うセ。株梁のさしも巨竹ふ祢重を。

材木等ハ大綱つけ。車智を構へて。最甚易く曳上
るゝ。是ハ人数多くでい。進退を得ざるに拘と。僧百
人許ハ〻〻寄るゝと。古今云造作ハ自由を法〻
以。然ハ最初造ハ此の儒者紀セ給ふ時。又諸寮役人令案
さゝ〻ハい。此年ハ法殺遠延ふ〻。二十年ハ〻て造営成
就ゝと。定。遠ハ工夫と考ハ〻。才覚と要ハ〻て。
人寸ハ切作ハ以べ〻。ゝ毎ハ又個の諸司へ。問熟セ
んゝどセバ迂遠し。唯作者院一個ハ功セべ〻とゝり。
ゝとハ以て。名云以法印の邸ハ風聚。遅速先後の
多等ハ編し。先次ゝ長の大仏師宗安法市。宗印法
眼の兄弟を招セ。次ていハ組治者匠等をも招ゞんと

て。木工頭の大屋軍。井上源吾の方へ言をさされ。郎役
法橋人軍を。悉く上京セさせて后。造営のゝハ始て。
按配遅速の立法をゝ。又寸形うち探ひ。考太答
へ披露しまゝセ。名所存を云上ゝるハ。君の仰を
色ハ聴ひ出さぬ。小要時ゝて令発ゝ。仏師組
治等の縛や先ゝん旅。材木裁制の縛や先ゝん旅。
と。宮ゝセ給ふ。遠ハ答ハ出のも出のも赤面し。ハ叙
怪云して遅ゝ。ことをゝり勢て材木の。殺く出べ
き山ゝと撰紀し。試むるハ口ハ。み別。伝及の木号。紀
及の熟師。此脩の源嶽幽。若ハ古。良材使材の
意ハ稱ふ。さハるハ早竟ゝれば。番別組へ番役

弛べき。經長廿個。堅察も亦二十個あり。第日此任職を
撰出して。其ゝの中に第ゝ見糸ゝ生めゝせられば。君ゝ
も中に第亀。いと鈍き亀ゝおもゝゝ引る。正理の中間に
直あど湯りて。區ゝの玉へ下させ給ふ。然る程ゝ四國
九州の人ゝ。土佐の山中ゝ投て伐材あゝ。南海を押
流して大坂ゝいゝり。京都洛苦院絲へお沒きるべきゝ
決議し。あるひは三遠駿の人投ゝ。伝説黄昏山亀深
の山苦ゝ鋸投。巨材傍木を裁採。本苦河を下して。勢
尾の海より。入港を苦嗟き。それゞあるゝ株木ある物
へ。後きる巨材あゝ紙ば。伐足ゝ。ゝと四國九州紀
尾の山奥。あるゝ伝甲ゝ玉るまゞ。善く苦見きども。

芸國ゝ懸へる和ゝ。富士の南岳ゝ。て雲霧
しゝり。およそ運材一本の費。人数又万人。黄金多あと
ぞ紀されゝる。大都洛苦院。大佛光ちの境内ゝ。
土木の張場を設揉し。義内中ゝ二十余丈の人投を。
凡略三隅ゝ分。大仏殿の礎固と。石墻と。假山と。運
三結搬と第力せ。むゝて。第丈の石墻ゝ。寛竟
て大造あり。凡きべ。凡一箇の玉兵輩。一統ゝ成て励を
しゞ。後日ゝ越別の法勢を增加し。石墻結造の人
投ゝ庸使。凡潜ゝ。凡憶ゝ。運石墻の末世ゝ
遠ゝ。或ゝ魂器石とゝ。あるゝ祐盤。或ゝ伝歩
石あんど。温泉のみゝ倫去らまて。絶ゝ威崩せら

とん縛。あんぬべ〜〜〜〜く。初端ハ些さ紀方石ゐく。秋ハ畳
セさセ給ひ〜〜ども。遂ゐ彩者大醫石を。結大名ゐ命
嗜らと。褒め〜〜樂整さと〜〜〜〜とぞ。紙中ハ蒲生氏々ゞ
抜セ〜怒ハ。徑四間ゑ一丈二尺ありり。綿て這倫の環
石と。乃考ゐ〜〜揺さべ。宮日易ハ移さと〜〜とて。石の絡体
を締金樣ゆてをべらく罩きセ。多勢の乱矣を號ませ
んぞと。本汐呪ゆて曲弟おもしろう洲をセ。吉玩の輩
ハ吳形ゐ歩扮。風流ゐ粧ふく。一時ハ歓喜〜。一時ハ笙
鼓〜。歪苦を高をて〜〜去むる。往おそあと。洛中の老女
男女。見物ゐ出ゲてゐ。ゑもも栽ゆと力拳をゐぞ。白川の
流石より。大仏の乃切ゐひきよセる。勿論史迹のおと

ゐもあらぞ。拙妻ゐふらべ去ゆをバ。汐中後七日ゐ涉
りしとぞ。遂大結搆ゐふらづらひていゐ。本合奥山上人こそ。
土木の大物軍ゐ〜〜て。日く〜の傭夫又子人づを出し偽
搆りセ。日渡二子日ゐ年ゆをる往ゐ。佛像堂宮成
就〜て。梵殿をまぐ〜彼鑿ゐ〜。今日や大供養の法筵
と開クセゑゐふ。此ゐ殯奉の法師。僧侶で瞻仰をれ
バ。紫磨黄金色の慮遮那覚を。結跏趺坐〜て在しま
〜。烏恐ゐく孔をて。翠天の雲を裂き。白毫あ〜とゐ輝
きて。皎月ゐ光を交を寫。殿ハ西面ゐ〜て。東西二十七間。南北四十八間
櫺門ゐハ一丈四尺の。金剛力士雙立を。四面ゐ巨廊を繞
らし。廊の外ゐハ。白櫺紅楓を交植。巨廊南ゐ百北間
東西百間ありとぞ

殿下の
大業
忽然と
東山ふ
大仏殿を
建立し
給ふ

験ハ仏法興隆の大切の縁。これより恪大なるいふし。退
墓もろともゆかしくぞ。

後陽成院行幸干聚楽亭　附　和歌歌題

紫宸殿松樹を右大臣ハせしい。虚空。実空。延喜帝の神
泉苑池ハ白鷺を捕て。八位ハ右大臣ハ。今ハ八位鷺の
名誉伝ふるとゆて。扶桑の帝縁を知ぬよりく。茲ハ尚
今の帝王。後陽成院と称しそなはるハ。百齢十六ハ
おもく〜まく〜て。天業を受給ふ。現ハ此君の徳なる也。大
化延喜の后皇ハ。頗次減りなんとおいせば。百歳
中ゆを傾け。万民堂を合せばとゆふ事。まさと
ハいくゝき幸福ありと。京人絶て歌合へり。共冥加ハ

も。此君の聖徳を仰そなはり。最号恭おゝしめせば。
紫宸へ行幸を悔欲しく。天正十三年の冬陽より。内
邪ハ屋慶を経営なひ。斟酌て成就せしらば。
宮賀行幸を以勅まつらんぞと。深くも称恩去給ひ
しハ去ぬる十ハ年季の秋の央を以て大坂の城より
紫宸へ移来へ後撰ある。万徒の用度金銀珍宝を積と
る紅粉百被。淀の小橋ハ朱臻ある。所迎ハい拵京清乱
法慶古丈の個〜。淀名羽ハ充満。その翌日より。
祝儀を献らまる輩。門前ハ市群ハて車馬の憩
場ハ所ハ。然るあ〜。やゝハ頑て焚望を切ハ〜なふ。
行幸の繕を果畢ぬやと。思昭記せらる。徳居慎ハ

命ぜらる。玄以法印嚴いとふ猛有おとゝふ覺へ。情で
奉弟あし。或い法家の舊籍を撰繼し。あらい故実
識ふ弓捺りて。其式大祭。個徒志りをべ天正十六年
三月聖の日をもつて。聚乐へ行幸おそしまをべふ。陽
陰察より。奏冥あ〜まわるセしらども。此歳又月ふ国
あるおや。暮春の天象牧宮をふして。風雷痛く道路と
滑セべ。巷ゝ公ふ復命奏らく。ぴづらんで吉日を曆數ふ
宮えんや。宮天の朔晴ある日こそ良辰あるらめ。宮雲
留て。晴朔ある時と待べきありとく。三月十日ばより
定めるる日と尚延給ふ。浩て宮去曜来りて。卯月十
四日といふ日ふありぬ。這日巷ゝ寅の上刻ふ起出と

まひ。禁中ふ入覲して。法蹟所任の個〜を呂集め。行
幸の準備ぞ做させる。まゞ緩優あるやうふ思されれ
しふ。殊のあらふ大意ふありるふより。奥人松煙めを
ろるゞ。頑て儲の用料度あをべ。清府の軍弓箭と軍
し。上達弘已下内外の用個度と〜個。既ふ行程を見ろ
りと奏〜ろ見べ。別後南殿ふ出所ある。用東帯の用
衣い山鳴色とろや。用産殿より長橋の後隙まゞ。筵道
調味ろり。殿下用粧と相ゑへべ陰陽察反用と勅む。
ふ司給の奏も例の如く冥白筋と呼し給ふく物答
のよ〜と浩ゑふ。用剣孔い中物芳釈朝臣。用草鞋い
孔奏光帝朝臣あり。風輦と用階の用ふ憑まわらセ

左右の大将は紙已下側のごとく勒めらる。四御門を
おゐらせ。正親町と西ゐ攀て。張乗京まぐ十ゐ丁の
間ゐ。通地堅の警固士六千人。諸将列の取次をいたす。
先兵の武士百八個三行ゐ弱せて路遮と除しむ。一行
と三十六人として見と信ゐ烏帽子袴といふ。次ゐ女母の
准后女御の輿。典侍局。白當内侍。其外女官。采女ゐ。
擬連れる轎ゐ十餘乗ゐ。金下簾葉ゐ。四乗副百余
個供従。雅ろへ粧をさゝんや。今日を一期の晴と思念し。
金ゐ玉の光を被らせ。光ゐ紅紫の色と添へ。親因も弥
ゐまさるらし。此ゐ世を遠隔りて。塗輿ゐ座を後達へ。
古之宮後。伏見後。九條後。二条後。菊亭右大臣晴季之

後大内大臣公雅公。飛鳥井前大納言雅春卿。四辻
大納言公任卿。勧修寺大納言晴孝卿。大炊御門前大
納言経頼卿。中山大納言親綱卿。烏丸侍従光宣卿の如し。
前駆を勒むる面々い冨ゐ。西園寺前右大将つ佐房左大臣
宗陰。正親町丈ゐ房家。柳原宮内権少丞資時。其外
ち控帥修遠。勧修寺控帥光孝。土御門左馬頭久修。民
部卿久修後房資。施薬院佐秦院佐朝臣。攝津女ゐ奥御
朝臣。西洞院左兵衛佐時宗朝臣。右兵衛人式部大亟清
原秀賢。紙屋橋。冷泉。吉田。日野。烏丸。万辻あん
ど次ゐ次ゐ貴主の々達。数〻として列せらるゝ。
連綿として繰出せゝ。給人四十八個の人〻。律呂を調

べく。安城氏と奏さるる。近年ハ歳ことゝして没らせと
まふハ。今の風聲あり。近ハ路ハ古大臣伝輔ニ内大
臣伝雄ニ。続て上々十古家。伝此次ハ参関白秀吉ニ
の八樂さう。是ハ茶孤の雪ハ加茂。稲荷。根坂。元桐
大名。池田。稲屋。中川。佐役の勅家七十二人。新亀吉
右ハ三十個。幸輿の斗。嵩持。傘持。菊鉢。舎人の徐
徐る御別。後陪ハ引ちる大名家ハ。加賀。丹波。松浦
就中。敦賀。松任。京極。土佐。三好。こゝの後士の人和
を。ぞ思ひおもひの扮ハ。万珠玲瓏として。朝暉ハ
映ぎるが如く。百花燦爛として明月を欺るハ似さ
り。這引程と辞まんくゝ。又嶽の辺きハいふもさゝあり。

西海東西。南北小陸いひ
ハ。ふ重万重ハ之ちせり。現ハ天ニも感応あるハや。
明朗ハ晴昇る。朔日の輝色も。赫く然さり。路次の程
さへあゝぎれ。ハ。己の中剣ハ刺ハ軍ハ。ハ。御おそしま
く。祭華を車集ハ遅至まいくもれば。右大臣藤原
公。車の八簾を揭まふを。簾く然と下御ちゝ。えた。
万里ハ路光寿朝臣。八稲を探てうちふなゝてまち
り。上達部上人後宜の所ハ憩ハ給へば。参冥白ハも
四御門を冥ゝくゝ。ひ妻戸の廳より投せしゞ。八座の
方右を奏汎ゝ。自分も八座ハ名セゝ。ハ。時ハ雅を
後ハ畳ゝ侍りて。八茶ハ冥ゝ。小要時流

其ふ足出ありて。ほを屋の裝束を改めさせらる。猪在
して五座迫く参りて。ひ名屠蘇の親式ありて。酒宴
を勧めまゐる。初献ハ宝雑副肴ハ鯉の羹二献ハ鱈
ハ副肴ハ鶴の羽盛。三献ハ鯛の羹四献ハ蒸麦ハ輔
鮒揚魚。五献ハ色の碎鳥羹。ハ副肴ハ近江添の一
掻魚あり。最も三献の第みゝて。殿下へ天皇を廉場お
る。第七献の時老ハ剣を献る。渝次ハ鶴ハ。
鶴の羽伏。略の壺煮擁汲の甲盛。鯉の糸積。鮒の揚鮨お
と。侍男家ハ名取る魚章ゲ。庭丁の任られべ。三番実ハ
又方又色の。鯛拒を鮫ハ十字鯉ハ。雪色花香の秋胡
と竭を。鯉鱗の魚軒ハ。砧を砧ハ杉の隅まで吟味ハ。

雉子雲雀鶉の調味ハ松茸。山蕗。ひるふさ。雲煮。そ尾
の法を缺ものとあ。或ハ茸烹。尾花焼。ハ色鮨ハ桜の紫
を搖布時候の物とく山吹鮨ハ花鮨の彩鮮ハ青搖
鮨。笹巻汁の妙味をそセべ。次鱈の作利迦産焼ハ
ハ鹿狭まく。饗食を找むる邊ぞ調ぐる。青別ハ珍瑞
の光を放ち。鹿牙ハ水精の沢と含む。左辺ハ山味右辺
ハ海味皆也百宰を徴くも得ちん平。視るだろうさく
雷ハ驚しむ撥を也ハ庭の彩緑陰ハ。まぐ鶴初めぬ杜
鵑の。秋一味鞍発て文朱と味だふ地あ也び。彩青見
らぬ風情して。花弓弥林ハ百子遷ぞ珠も。名月ハ秀る
ハ藏窟の。民文る隈くハ。純白梅の謝踐りて。君待風

聚楽へ行幸

ふ白姝あるも。綠樹を啣て囀むべく。細嘶鶯をむ池の上ふ。白き紅き黄金の魚おぶ魚鱗深つ潛つ〜く。あるハ蛟竜或ハ鵬躍せ。顧彩技捕寄上ふハ。紫色の紙下爰浸ゲ。南蓋ふ搖る〜模樣ハ。現ふ天女の下寄て。松上ふ歌舞まる歌と秀ゆ。遠方の風景近世の勧賞最く裏襟ふ幅ひまつる平。天就殊ふ愉快ふおもしまセバ。巷公いとゞ至妙と逸さセぬふふぞ。絡器流と〜〜として。這遠の汲ふ拘冥。代聲上下ふ在と所省個くハ。多歌万表云流ふ竭セざ最延有ぞ懐憶〜る左右さるもどふ今日の天も綬ふ思ふだらりふ暑て。十四扶の虚蓋〜と。微雲と裂て。吉野山の高峯より。輝也る月のさやるぞ。

毛〜ろりる良扶ろふと。漢武ゲ其泉庭の玄の遊び庭玄ゲ蹀山交の秋の乘〜。彼此懐ひ出らるつ。歌宴殆裏涼ろ。伶人歌爰紙と催し。又考乘古平乘あんどと奏せ。夜閑風微冷と送る比。秀吉公近年と奏しく。此家とたべり出ふ。翌十又日巷庭下條章と拵げて。菊多庭。勅使ち庭。中山庭ふ京さる。地子銭又ふ又百三十両を。禁中の旅と成し。地子米八百斛のうち三百斛ゆ。仙洞の旅〜。又百斛をもて六官厨の賜〜也。依亦江州高浦郡八千斛をもて。法門院。法皇家の賜とせらるべ〜〜なり。若ても献奏の形次をいな。紙子昂の子字文。殊鶴等の車こ賜。院番百行。〜と〜を上ふ捧まつ〜セ。虎皮一枚。惟紅の大直一筒。小袖

三襲大刀一口。を伏見宮邸宅祝玉ふ給ふ。その
餘堂上堂下の人達へ。各袋に大刀一口と進ぜら
る。天皇いよ〳〵うるはしく。月卿雲客壽祝の御宴
とり〳〵なれ。御器あゐ〳〵びゝ轉じて。万歳を唱ふる声く
ゆとろ〳〵。此日も更歌舞音樂。雜のやおえを奏る吹
笛。琴琵琶あもを迎らるべ。幸王ふも歌の森殿ふ
入給ふ。明朝十者六日い。曙雲薄墨の如く天ふ漂
て。殿の上刻ふ入撰ら。纖毫ふ降出ぬ。今日の御還幸も
止めらる。和歌の御会をとりよふさる

実白 秀吉公

万代の君い御幸ふきをぬゝん緑ゝごゝ地勢の玉水
契りあるや君待えゝる時津風ふ代と鳴せる庭の松枝

六宮 小彼丸

源風も吟静りて松ゝきゆまと義根の四方のゝゝく

邦房親王

おゝ高きる時とい去るゝ松多の指ふ味ふ業代のゝ元

二条 昭実

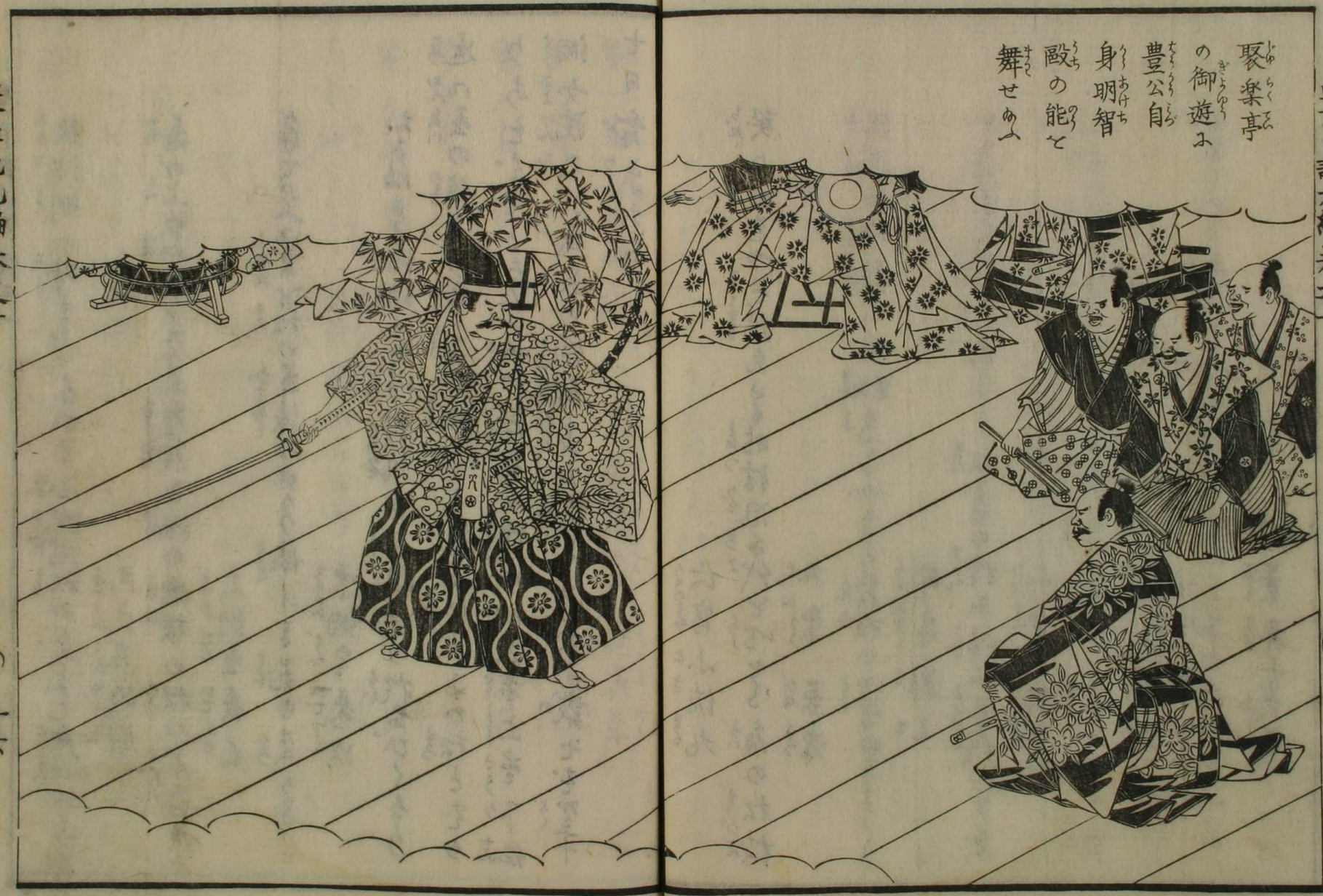
お生の松乃緑も久ゝふ義ふ代雅べき実とゝを洗

近衛大臣

日ふそよゝく去るを庭の松枝のいふゝ業の后い業一ん

菓亭大臣

聚楽亭の御遊ふ
豊公自身明智殿の能を舞せゝ



秋津洲の外まぐくあびく玉津風松おろして声吹ふ也

内大臣信雄

竜の上の山ちりくふ庭潢を池の汚根の松の木深さ

大納言秀長

みてくふ章と松の葉浪のゆうゆ姉しき気の笑うふ

中納言秀次

おさまる世代をぞ吹ふ松風ふ民の竹葉の松ゐびくちり

遠世の後ちり世云の歌しゐ世へる世歌ふい松とだち

りあそぎとちり此ふ聯る緑の和歌書上書下紙

洞女院及び武象の歌多ちをどる宴ふ戴セぎ望十

七日祭乗あり

第一番　萬歳乗

第二番　延喜乗

第三番　右平乗

第四番　狗海

第五番　陵王

第六番　納蘭利

第七番　採桑老

第八番　求子

第九番　還城乗

第十番　抜頭

ふ〜る絶る主上世歌悦のあるりふ世製と場ふ

ようだようふ八百万代とうされても松ちぐりあ沢時上

古の時　世云港で祥歌し其世返ちて

言の葉や須の吉砂ハ世ちる張りあ世乃君ぐ齢ハ

望十八日還章の世耀歌ちる。世云屋下世情殘惜乃ふ

見給ひ。世茶ふ茶ちるひる。公献〜の儀式ある。令人

遠城乗を奏ぬるべ。去来や還幸おもゝ〜まさしと。内外の個くさぐめさ紀供まの猥幸ぞ調へる。這响弓蔀絵
志る毛榎ホ。金沼の波々折る。茶地の精好ホ。菓
の用紋を縫浮せる。日重後志る物三十櫃。唐榎二十荷
茶紙ホ次で掛せる。是ハ這日頃の款星器ホあんあ
りりし。用幸列幸幸ホ弃一巻関白ホも。馬上ホく
供奉し禁庭まぐ還り。参内幸〜てまつる。望き
べ十九日より廿一日まぐ。三日同西宋幽ホ洗ぎる
とぞ

老公令役大菓名於小野　附　菓侍風練

天授よく義浩の鄰ホ荒這と處て。秀吳の菓と泉

清洗ましの三枝目ホ　古政あり　とと走も。老公いづんぞ此ふしく。
菓の遊弱を翁さぐらんや。芝宮ア至のいつる雑あり。
猶若ホ銚味も。清泉白石以て。又繊の清と潜ふ歴く
以て。心ゑの哲を沈さだし。こを綴して中まぎれば。
お猴習くとして。清風おの波うは生ぎるゆと笑ふと。戯
菓の絡る也。其味淡爲ホ〜て。笑紛充女四一ホ交らし
む。味の淡爲をゆて精の。涼屋と礦和きるあと。顧姚思
強をべき紛と織らぎ。然るおどホ老ア陛下の威風絡
光四海ホ著く。孫〜て赤吉。高仁以後の戦国年月。遥
来動礼せしホ。此時ホ端南て静潜の。昊天と瞰仰。子
門の充幼子秋を弧ひ万戸の男女万家と唱ふ。四時晴

明ふ日月光を耀し。四民安穏ふ稼穡を做さ天津治風徐ふして。冥き如代ふ座臥をふいられば彩造の所裏乗の繁業淺蹈洞ふハ切も彈セざ。遠ふ於て宮室の壱妃。高貴卑の羅民日抜公私の所為をべ隨ふふ勝きさるべ一般ふ段ふ欠る緯ふく。宮中別外絶ざる事ふ。然ふ紀ざふ支人の情ハ。東西ふ蓋き時宜ふ陸ひ。奮きを嫌ひ新きを好して。所思連綿と止時ふ。蔵蔓ふる美風の穂屋ふ。金風涼しき黄昏を憚て。故至の烟の鬢出面離の其翠の花ふ。ぐと。玉兎を徙ふ宮さるふ。あるハ幾ふの曉天の氷を結ぶ。枯葦戦ぐ蓬舎の軒ふ。或ハ三波ふ声絶しき徒月離の

裏の袂を裝香ふ猶るを紫猩梅いと潔く咲出し。風情を情と表もする欲。緇ふ深る帽る傾げて。地嬌ぶ端ふ笑ふ。しつ。紫ふ緑ふ咲るもおさをさびふ。ふど區くふ羨して魅彼衣の綾羅。瓊瑤帳裡ふ徒焚の馥郁として馨しく。あるハ綿繡の褥ふ臥ハ尋常のことふ。あるべ。嬢しとも懷ふハ。唯寂寥る古を歎乗ふ。ふ。嫉婢をべく鄙風る。田野の景色を好まきさり。時ふ泉界の業人ふ家ふ易利休ある者特ふ。巷ふの賑着原く近来一條通蔵屋町外屋町とのふ西時ふ街ふ居を移を京来礎織坊才ふして世情の変交と名料理。並紀院屋より伝来る古流の業

るゝを轉搖し。寂寥なる風情を家とあゝは床まの
宵を囲ふ。古瓢釜を自在もて掛り。四固茶碗も
故意とうち破。清る器と珍宮の上ふ用ひ。猪戸の袖
の竹笹も巖素の辭あるを有さ。稲香帯なる新藁
もて編るも多て風流ふ表へりゝ。その籬既も長き
縄を揺えぬぞよ紀あど。清気霧吾の逸情を考一
としりをべ。茶の乃此ふ一変して後来屬異ふ饗鬼
古なる上猶遠。彩い遠奥新槌ふおそと。聚乐の異城
峯ゝ利休が門ふ傾き。茶乃おひふおこあいるゝふ。
下風ふ後輩あどゝ。此乃を墓思ざゝんや。京伏見大
坂堺の輩へ。競ふく古流を廃退し。吾もふのも京ふ

易の風儀ふ推接り。拙釜宇富。不寓菴の号を所輩へ。
祥の像く異ゝ。但の像く崇む。乃彩放信の巷街ふ
弥布。殿中ふ充塁るふぞ。屋下るいつとなく一時
の流奥ふ轉沢給ひ。擬辺ふ昭まて俸猟を厚ふし。
或ハ休茶が完ふ浸沸ありて。渠倪る茶
を吃し。おるハ自分殆茶ゝて。近侍の居ふふ湯る
あんど。吹今ハ唯利休を愛ゝて茶ゐふのゝ日を
涙る。見ふ一時の奇怪といふべし。時ふ天正十六年
十月朔日。北野の松原ふおひく茶綾言畀居交ひ茶
湯の大集会を発ふんとを懐ハ記セらまゝ。ゐ日八
月上旬より京。伏見。大津。奈良大坂。汝男の巷へ木

憐をもて結しめさぬふ。栗ゐを毋める倫族ハ。遠憐を乗て雀躍鳥舞し。嵯未号ゐの君ゐ世や。ありゐゐを上富を拜し。雲の上士と縒を合せ。袖を交へ。加誨ゐハ俺仏ゐ。名も雲上ふや晒さん。生涯の歓楽のおもふ拐ことあゝじゝゝ。寐食をも忘るゝ。まゐぐふ。会日をこそ候ふゐ。遊近ふ歓乐おとを結青ハ。ゐを翻きさへ忘捨しくて。空飛雲ふ風の。陰晴をさへ厭ふ間ふ。遠くも十月朔日ふぞ至ゐる。当日也昊天鮮明ふ。風力あくして暖ふ吹。日ハ熱ゐゐで和ゐゐ。野外ふ残る卅の花ハ。番ふ富まねども黄紫を遮止。も艶ゐん紅紫ハ枝ふ末し芝生上ふ末して綿薄とも表微さ

る。世ふ浮雲小春の撥候の。ゐ礼万拜祈待とも。ゐあるまゐを矢色ゐゐ。遠切ふ集へゐ遠近の景綺充まれ女まゐ。遠まれ結まれ。憐面の宴文ふ面て。雙素倹廉の折柳一つ。拜参まる輩矢張崖畧ふ百ふ十有餘個。亜野右辺の馬切まゐゐる。右辺右遠ふ栗房を設く。松下梅樹石背水滑ふ。松埜雲の菴あまべ。穂花曜麦蒔交ゐる女蘿あゐ。紫蘆門竹篇戸。遠薯。篠薯。紅楓ふ堅を穿ゐセく。それふ自在の約拵セゐる。生梅枝ふ樞を凋て。実扨戸の門搔へゐる。結房上の安綱交へ。実切角切。出炬。入炬。おもひく好ある。君ゐ右ふ君在く。乾炊操るあゐ炭垂あゐ。富士形の釜の雪摔けて

や。車軸釜のあるを置きてや。煙面ゐ数りる霧灰。式の如
くゐ篠まる枕へ。竹も辛苦ゐ岩癩る。菓笑菓枝へ節と
枯れど。甚と轉文ゐ糸と嵊。菓曉の綿花三湾。松竹梅
の天目ゐへ。雲鶴鼈壺の模菓曉りやありぬらん。ゐ休壺
あり。出枝あり。浮牡丹の水加ゐへ。莊子の壁の音らと順
うまき亭竹の柄枝を投きべ。焙烙釜や沸却らん。大国三
尺の正中ゐ。綿安ゐる菓籠ゐへ。甚炭剣炭おゐのも
そ。出炭四畳氏婦のきく。甚をとりて壺とまる。白炭
へ彼流朝成。烏と鷺の羽箭立ゐ。各秋ゐる笑き器。甚
慶あり。甚山あり。願種くゐ号を枕あべ。柳ゐ桂ゐ。桃
山ゐ。弥生をるる波波ゐ。卯月のそのゐ茄子あり。皐

月ゐの花ゐ八橋ゐあり。水加の沼花。秋の紅ゐ入る蔵
穂ゐあり。淮ゐ甚へゐゐ山里ゐ。笑ゐを甚壺の茅のゐへ。
紅毋懐竈ゐ焼ゐるりのぞ。ゐ湖の水加を懐桶形ゐ。西
絶ゐ笑ゐ鬱ゐあもど。ゐを平竈ゐ焼ゐれべ。國候くる
憂へゐ。中ゐも寂て冨可ゐる形模と床ゐ三日月の。
狗花活ゐ枯柳と。抛投ゐへ。ゐい所徒月。孤炭辺ゐ栖山姑
の。紀掃鍋ゐ白髪と。流ゐ誓鞘ゐ。絹ゐある鯨
鶏の産へゐちもど鵬と。三羽ゐ抱る蕙棚鶴の御の
番乾史乾。鶏舌と姫舞炉。卓と三誠の山ゐ。雲
ゐも乗ゆる煙の間より。ゐセゐる鳳鳴の孫軸へ。ゐ
羽の草歯の蕨ゐ。書院臨像蓋松の。蓋ゐ舎と

かりろくの。鬼くる幹を庵とえまる。古木の雲の古紀を。苔央ふ囲ふ栖居の。二畳三畳と陪りせぐ。んも廣も潤らりある。東乃の動静。最饒し。軒とあるべく此い。中立あどの設けあや。筆結の亭ありて。蓮花の像ふ織る。苗根四産居亜い。殆客人ふゆそらひ〳〵と。遥の絶景セ〳〵ユと覚ゑ。岩と窮ち壜と凹く。炉と関を〳〵る釜弟絢ハ。媒古て赤を作もあり。獲もあり〳〵如意自立。甚るの風炉い伝秘を凝し。炭灰中。筅ふいふ決を練く。金抛釜ろ〴〵風ふ陋し。渡中の濃。淺理の涼跡〳〵と表ましべ客ふ入り。弦面さちまち葉ふ還る。鍍ふ〴〵ふ教外ふ伝の。理外ふ妙理と御

まセ〳〵。戯平あもしろや巻ゑふ。三慶ふまで囲居を設け。市秘造の孫器を彷らせ〳〵ふ。其こふとあげて紀セ。

萬歳大海　△素信長ゑ四所拂の茶壺ちり里二寸三分横三寸三歩上茶湯柿ト茶壺柿土瓦めふ宮のゆ〳〵ちり口一寸八歩徹一寸一分上り一尺三分底寸寸ふ歩糸切

盧壺墨跡　△あんらの寸壺と展覧ふ〳〵ふ未考

蓋なし　△色ハ番乾茶枚を立る具ちん歌うの中ろぶ〳〵逆蓋ふ背して茶の赤き器ふり

内赤盃　△器様盃ちり番盃みてもし大風ふり内赤ぬり底黒塗口川の角入

浪華或家藏北野大茶湯高札縮寫

一来十月朔日ヨリ十日迄天気次第ニ被成候ハヽ北野ニ於て大茶湯ハ
不苦者ニ付ハ抱ニ成候ハヽ可被成候ハヽ来月可催
興禁美麗無比類候間ハ貴賤ハ不論ニ来会可催
候者也

慶長五年九月　日

右之公儀ニ付ハ諸具等立ハ茶屋ハ沢山
可見物者也

天正十五年八月

一北野ニ茶ハ十月朔日ヨリ十日迄天気次第ニ被成
法ハ茶ハ仮付ハ茶ハ仮付ハ茶ハ仮者
ハ仮ハ見たい知ハ茶ハ仮ハ

一茶湯ハ心ニ者ハ茶ハ
茶ハ茶ハ茶ハ茶ハ茶ハ
茶ハ茶ハ茶ハ茶ハ茶ハ

一屋敷ニ茶ハ茶ハ松原ニ茶ハ二帖ハ
ニ付ハ茶ハ

一遠出の去迎ハ見ハ十月十日ハ
法延ハ成ハ
ハ茶ハ茶ハ茶ハ茶ハ茶ハ
ハ茶ハ茶ハ茶ハ茶ハ茶ハ

附　茶ハ茶ハ茶ハ茶ハ茶ハ茶ハ

帝手前ニ

奉行　筑前殿　蒲田権之丞
　　木下大猪言　宮木右京大夫　中之丞殿大膳

立端　中ノ高サ　一尺三寸九分
　　同　一尺二寸三分　横　一尺九寸三分　裏ニ六枚之内ト有

あり産の名ハ存生の作といつり

△菓入ちりつぶさゐ朝日喜慶の菓入といふべし　加茂口帝古清つの墨の乃号ちり本朝日域の州名ゐ表しく菓の色合を志のゝめゐ朝日のうつらふやうゐ次同といふものゝとちり

あさひ
朝日

△釜ゐ瓢ん釜あり菓入ゐもゑひやうえんあり定めく菓入なるべし形ひやうえんゐ似さるをもて名ともを唐物ゐして宣宝第一ゐりハ造り撰り返しあり

うえん
瓢簞

地菓赤ゐゐ梨子地あり上菓ハ漆墨菓ゐ蒔墨色菓まぐりく殭乃くとかくる也二す二歩半也り点す余ハ八アル色ゐ生一す二屋但云瓢ん二ハあり風流泉ゐして班名を称ちるもの可し矣

菓入ちり昔日狭男ゐく大鞨小鞨といふ二の名ハあり其中の小鞨ハ大政所聚乐の爭ゐて名ハそろへの菓の汐奥ゐゐ宣ませらを徳川云へハ菓進ぜらをし時の鞨乃ゝ鞨ハ鞨と号し侍へし名ハちり聚乐ハ朱ハ名と志ぐをと改めらるゝちり

しぐを
時雨

ちんくわうのちやまや
珠光菓枕

珠光ハ村田氏東都台市人称名ちの光明院の侍とちる二十歳ゐして仏門を避室加三菓ゐ寓を堀川ゐ菓室を結て珠光菴と号し獨虎軒の名あり或ハ南星とらふ和歌と孫し歌を若を東山天山云ゐ統て菓の武法を宣む文亜二年又月十又日物故　珠侍ともちり此人菓枕の侍人

ぜうあうゐもが
紹鷗茄子

形ちをびゐ似るゞ扇ゐ名づく茄子の相ゐ二ゐあり口ゐ弱あく薄張ゐして金蘭のある形もあり但し扇撫をなをびとらふハ誤まり扇のれきハ茄子ちり扇と御るハ扇

ぶくらちり　鍋弥孫平治研指の紹殿
茶子八幡山瀧本坊不持の函師茶子も
用然とゆへり昔ハ吉の金立の時ハ茶子
ちゝでい用ひぎとちり宗易以来略しゝ
肩衝文琳丸壺瓦ぶくらちんど用ゆるとな
り
土宗色ハ造り捨り返古地茶黄銘茶と
源ミハ落黒黄の銘茶ちり後世りの茶
ハ地茶よりおし流し長二寸二分九厘胴
世り古寸八分半ハ径九分底一寸度ゆ之
因ホ云紹殿ハ始名を中村新ヨ弟といふ
后因幡ちホ任ぜゝる甲斐源氏武田信
光の裔ちり信長乙の口呼給ちり

△通名おまま器といふ長坂弟の毋ゞ作る
茶流ちりいづも器といふハ高甚高く
しておきの形ホ似るゆゑ名ちり〻三寸ハア
ロ三寸二分高甚一寸重目古十匁ちり

尼子基

△紹鷗の作ちり

象牙茶杓

△同人の作所のゝ茶杓といふ

折撓茶杓

△芋のるホ長しゝる茶入ちり

芋形

△通名ゑくがゝちり此茶入の底曲りホ
らぎゑくがあり和玄の面の如く下紋ホ
して醫あるゆへホ是と嫌おぜとも云く
ぶホとも云ふ
土佐黄金ホ下茶漆柿及上茶ハ漆黒茶
ホ黄紹の茶まぢりてもゝくとかゝるもの
ちり

乙御前茶

此外秋田肩衝の茶入井戸の茶碗ちんど。茶てゝぞへ
ぐさし。検ホ高目と続ゝを。底下ホも紅自茶と称じて。
法士ホ縄ぢる緯二寸ホ近ぜゝ面ふ其一寸ハ近清
伝婦乙日聖輝資々織田信雄乙同信包々二寸ハ其

臣秀吉公同じく秀次公茶田利家公蒲生氏郷子宗易より三度の織田有楽斎次丸秀勝堺屋宗陸浮田秀家細川忠興等より佐賀らしき数寄屋と。此後おらせらるんとなり。庵後七八個率ゐらるる。先一ふ堺屋宗陸が。囲庵ふ投さるふ。宗陸と例ふしく。逆へしてまたり。かふるとと東屋ふしまねらる。公ふも宗味吐然と。此茶を此数させらる。此より宗陸とも体しかして。古方右方視物なる。ふ。当日ふ所の一堺四維へ。茶席若柳ふるざるふく。風雅遥情なるざるふし。別ても秀徳る一役座の茶係で在。髭まん白ふして。額端懇ゑ煩雪ふ。三重の敷字とおろるへ。八十年とるる

齢とも秀吉。一器の黒柳ふ賜る。茶湯度約編ふしく足ざるふ。別越の松の枝窯まより。観世絢のて下る瓢へ。渠弁也ふい似もやらぐ。世と過ぎる者ふへふ。当て名取の炭もも刃ひざ。茶杓捷て泡らを汐丸へ。宝を一姫の紫ふ凌ぐる。傍通ら蝋斎を秀徴ふふや。安宝の杓箭廉つの破瀧彼此の意ふ。とも秀一ぬ。器風騒ふる接柄ふる。ふ公弭ふ此意ふ幅たせらる。ひ。吟くと。て。能壺の撮ふ縋と弯臭。ふ充傍茶やある字と室へ。茶然揮舞。て。頑て準体。まぬらせらる。松梢上ふ魚安ふる。細ふある瓢壺と徐くと操御。蓑像。ひとく粁ら。を天目ふ。白

汎扯拉て瓢中より。焦椒を揮散し。汎上ふ陸して
で路セさる。老乞弟陸世紙し〳〵ひ。這いおい風味
清箭あり。姫ちり奇ちりと。費峰おさ〳〵ひ。見ん蜜
の弟茶味ちりと。数遺撰嘆おさ〳〵ひて。秋祠の奇味
ふ。四意や失ちん。別ふ涼魚や立し〳〵ちん。搗さる陶
器を。楊下ふ墜し〳〵。華ふ碎らせ〳〵ひつも。あふ
作勿やと室ひる。充傍襲恭で奇顔し。一天だろ
擦ひる。義然とし〳〵て言し〳〵て曰く。吾自体ふ四心
焔を。先指古祖へ体丁の寓器とさる。摧奔し〳〵。
まし〳〵。況や瓦硯の泥壷。心ふ。陪む畜もち〳〵。京来戦
家の弟ちりさるや。大ふ世界と囲沼し〳〵て。釜ふ風面

の巷を彰日月とりて天国とし〳〵て弟ふ山川の気を汲
得し海とりく風姫とし〳〵。万民と富とし〳〵て。世外の味
を吐さるあり。見一体呼の歌さる如利体もあらと汲
りのふし〳〵て体字を取ふく縄墓をあらん卒。然るふ渠
ゞ若ふ箱便屋室ふ媚と星をい端日の立志ふ鴨爰を。
見人写の又懇ふ溺し〳〵て。別い意最も遠ふふぞある。然
べさて利体ゞ。四識山科のノ恭ゞ。他ふ塗ると听る言
あり。利体ゞ切き時のふい甚厚摩人あり〳〵ゞ。人ふい意
志軽箭ふ〳〵て。いと〳〵残畢車ふぞ成る。渠い蜜ふ
るを知て。衰ふるを識らぞ。世界と妄想と貌じて。極く
渉らべ一身ふ苦悩ふふるべきふ。總ての人の為ふと

あるねど。人冥の情態限りあり。願と能知べ另と全ふし。芸を知らざれば禍を招くと曰へり。ノ翠ゞ金言恐らくは為らんか。渠が君ふ業好を勧めまわらをるの根系は君ふるゝの徒者あるとのく。天ふ翁くの乃ふや入給さん平あど。芸を練るふ仏教を侵をの恐怪あるとして。自己ゞ子澄付業るふ工をて。金玉の美ふと捨さ。尾原ふ森しき。疎物を奇とゝく。或は茅屋仔離ふ意を凝。或は荒壁を林ふ情を舒て。破ゝる古擺ふ味を含ませ。喝める壺ふ香を接ゝも。いつゝ情態の限りを去るとく。人の笑む図ふ慢り。逼ふ衰時の玉るを識らず。今日の大舎翌日名ある狩と。狩静ふ演説去ゝるとゝば。老乙仏系笑ふ。みゝて光信徐は利休を猪じて。次で秀吉を朝るゝんを宮ふ。云下を侵して言さく。嘉如作す。油とのて平結去ゝるふ切勉の左まは。名系ふ財ゝゝてまつり。朝暁猪狸の舌あゝば。天祥地徳の刃はゝくてや見べき。渋吉一尼猪るふあゝず。然むふあゝず。今日業をのく笑紗とゝく。仏海兄弟の寛仁大度を。情発ゝるふと所ば。野納世外の刃ゝりとゝ人ども。活ゝるゝちは如何でゝ君の恵沢とのて。另ふ業らでやはゝるを。愛慧の砌ふは一句ぐも敷ひんとゝて思念ゆを。あゝゝ猪朝さべりんやと。所ゝ四をて仏系笑穏和平ゞ殆

秀吉公
北野の松
原ゝ大
茶會と
催さん
と高札
を建ゝ

めさるハ是その足ざるゝ和ちり。解和をべし解和を
ゑし。そゝ弾あゝべ孤を捨らん』あゝありがゝの君
あぞおもひ。倘拙弾を愛聽べ。一弦を切て敵ぜんと
を。奚べ遠あ味を吃唱ひて君微臣を賞をべしと。
是ぐるものあり。其ゝ把て彩い何ゐや『然淳ふ一枚
ハ梅ゑ一枚ハ栗ゑあり。菓ハ系除姫掃徒の切あ
りて臆麗を通り瑳恒と退ひ。鱶きと刪り。厚きを
去る。舎とゝ解ふ妖ゐ。碎と覚冷ふ奇なり。
あゝとぐゑふ濃菜と咽て沃ぐ刎べ。口中を清涼
あゝ。あめ。所有徒毒を去て。然ふ。して歯牙と咽
寧を。然ハあゝとゞも多咽と梅ふむ。湧ハ湯ふ。して菓ハ

厭陰梅ゝ。因ゝ渡を嗜む輩ハ紀滅。菓を好む
有ハ痩癮を。飢ふ除ゝて菓を痛飲ゝる刎ハ。菓毒
直下ふ腎腫ふ欲入ゝ。猩猩の血癖を冷徹せしむ。
ことゞゝめふ無疾発を。虚を血弱の性ある輩。菓
を嗜むゝと淪しゝとべ。精血渝次虚ゝふしゝく。疲
飲。唐狐。痩癖。莫痩。嘔逆。洞泻。疝痛。痢疾等の法
痢水火大ふ逆して発紀。形ゝ癖ゝふ病病のゝゝ
めゝるを拂ゝんふハ。梅栗二箇の実ふ如くぞ。辛味
魚毒を解ゝる中ふ。毒中の毒ゝる河豚ハ沈精
とゝゝく毒を消を。芒辛を粉じて甘ふ圧せしむる
の理欲。君ハ天地の甲梅を。よゝく用ゆるの妙を得ゝく。

孫ハ嘗まセこゝふとおもふ。菓味中ハ毒あると商め
さぬハ。一隅ハ故あると知らぬハ似よう。嘗笑いありと
因目を。了得の要公眉間と顰め阿平光信。一隅
の故とハ誰何。『宮をでも豫て商めさん出ハ係うつ
雲末ちう。』甚ハ頑てしも若知りぬ。今川。長尾。武田
ちんど。ハ撰十柴羽。紙を用ひて。ちぐく刈ども根
涼く枝鑿りてハ十日百日ハ伐獲ぐさし。平も疎
着まぐく羽と探ども。遠く出るハ熟時を得ぢ。『そや
皇ふな。光るの所獨戸を出ぢして天下と知り。庸
と家をぢして天乃と表る。出るちと孫遠ハをば
甚知るちといよく女し。是と以て至ハ。ハちぢし

て知り。見ぢして名く。ハぢしく成る。ちんもれば
若自分賀を煩もしさんや。『然ばハ席疎略ち
る欲「紙憶いうでうちをと孫らん。然りとハども。天
天下を取者の。上世ハ治とりて做。中世ハ力を以てし。
末世ハ孫を以てを。治を以て取ものハ。漸仁淡義して
甚治最久しく施世と累てちをを獲る。武弓祚切
の若別是ちう。力とりて取者ハ異ち孫し礼を泓て。
他の故ちるちちハ至る。ち年を累てちをを定む。
源経基義家の公達別是ちう。孫と以て取者ハ。撥
を逆ハ会と通ち。ハハ施を陰ハ殺ちをども。他こを
を覚る繹ちく。華然ちとしてちと集むハ。源南ち廷

尉の古物いものゝへ。此ハ存在ゝ云是あり。然ども仁義ハ斧と磨らべ。殷湯周武も比もるハ是らぞ。仁義を先ハ〳〵孫略と后ハ〳〵て。ものと伐らべ。丹藤ハ信を伐樹ありとも。伐ゝ用て選て梁ハ。恐惶〳〵所納ぶ孔言。人その名を称もる時い後言紀らぞ。女その悪と若る時い改むるハ仮あり。賞を お對して業を蓋ねぞ。業渉と名もべ。艶曲を奏セぞ。他の縁と責ぞ。自ぶ長と説ぞ。学ぶ所ハ心の為ハ益あらんゝと先ハ〳〵て。多年て深く思ふ学ぶあとゝ云ーを時い。惑もべ。学ぶもと多乃もべ古を。古人も人をべ。学ぶ恐の れを失ひ。大罪死もと

も縁ひぐゝ。只賢愚叡と死ふハあんと。扨そして ぞ伸〳〵りる。巳く然と笑ふもゝひ。此家の哲練殆得て 物あり。そて放斧の日を迎へん。至呼ぶ富号所ま有〳〵と。汎れさセ給へども遠后敬て沼ぶれば。黄金一束布施ハとゝ。衣をより探出く揚り給ひ。次舎ある烏丸亞相の囲字ハ入ハありつも。名柏の宿郷と愛賢〳〵ゝひ。此隙ある篠塔の数寄屋は。日来冥へ〳〵福河絲ぶ業室ありと殆昭され。笑種ハ投て愚ぞさセゝゝひ『煤掃クぞ門松立てべ。鉢摘らべ。かゝる家ハも云い来ふりと。孫ぶと る寂素つありる事とて。此ハも是を投さセゝゝひ。

芸術の雅人と初嘉として。笑とあく畢とあく
道路と為く。賞翫の仏洞と下楊ふ。庇食安穏ふ
歓躍して。芸術沢と瞻崇する。惜むべし嘉日多のを
しめるべ。魯陽の戦も退転るふ郷なくて。白日
西山巷ふ流くと歓へられい。巷公ふも雅興ふ仏情
残らせ給へど。昂くとして褒乗の事ふ還仏をぞ
保しくなひぬ。

巷関白殿汐状調感上下附楊金弦慶

汐ふ曰頑人保くなり。公庭ふ美音をとい。這巷公
が身と畢ふして。禁庭ふ奏給ふふ。あさらも合期
を。嘉時ハ天正十六年十二月の緯りとよ。頑て巷公

呉松紙後といへる紙後者と唱させなひ。紙の曲節と
嘆ずせ給ふ。既ふ芸持の熟しられべ。然くば自一奏舞
ふく。帝の笑流ふ彼へだやとおぢしめされ。這緯と命
発さる。これふよりく禁ふ中ふハ十二月十日こそ。巷関白
が自身ふく。堪紙せさせなひふぞ。暁るふも暮
るふも。芸嘆のこそ蘭りられる。然ちどふ嘉日ふ至り
りをべ。主上とそめられてまつり。左右の大臣。殿上人。典
侍。命婦。公橋ふまで。秀吉公の紙と親だやと。仏階迎
く巷集なひふ。巷巷白ふハ十個ばりの庵逆と
仏率。辰の下刻ふ褒乗と出所おいしまく。十六夜栗
毛ふ跨りつ。鳶丸通を汐せつも。徐くとして冬内ふ

る。今日此ふ裏ゆせくゝゐふ場紙い。茶代後世ゑあるまじく覚ゆめまべ。茶甚の結搬衣裳の光沢。金と栽玉と数を。所観憲皆耳目の驚くざるいる。初めふい明智伐といふと茶ませ給ふ。呉松編を務るとうや。此ゆ智伐といふ物い。道頃元利輝元々。茶田利家々ふど。ゐの日の人猟おまくゝ乃る時。佐佐くゐふくゝぞ。ちの外弓聖猪。吉聖猪あどの弥佐あり。呉松これふまと附さまべ。最おゆくゝろきるゆふん。佐此紙も芸尾す虚ふく茶納まべ。堂上堂下嵯嘗と。祐濱の声天地ふ応場く。数剤ゆも止ざりゆれば。ゆて実白ふも熟汚と振ふく脱びくゐふ。二ゐふい呉松銭後掾耶郭の茶と勧めくり。此時

ちゆこそ芸ゆ弧絡柄の太刀と夢ま。虎の皮の大紫裳と鶏まふ提ゆくゐひ。孔雀の羽りて。織成くる道綾と。結搬まで彼陸くくゐひ。搬魚の正中ふ沈然として座を結て。呉松ゆ紙と見贈ちくゐふ『み十年の歓乗もま佐ふ伝ふ』と強迫と紀。秀吉ゆ声優く然と『ゆふ何るも一炊の夢』と。大吉声ふ唱へくゐふ。芸嗚凛くして数率まぐくも通微まくくゐ。上下弱感ふ搬入くり。佐此茶曲奏納めく搬魚へ入らんとまれども。芸ゆ分搗ぎも志くゐまざれば。呉松ちどくく迷惑ま。秀吉ゆ吟くと笑ませくゐひ。呉松大俊と命セありて。先とおて退くゐふ。佐市より猪乗の者軍へ。砲物場りくるふ。

共二
殿下懸
瓢子ゞ素
湯と服し
賜ふ

君公ふも紙衣を縫行社と同様ふ。座上ふ出さるひ。
拜領物と肩ふ拭て。活然として入給ふふ。見る人痛ふ
歎きける。君冥白安位の至極ふ在しなぐ。別を惜る
ふ扶給ふ縛。名ぶ人の紙ふまぐき所なり。一時前田
侍従院。閑暇を待ひまいるせつも。風流して言して曰く。
君ふいふ行の内多ふて。天下の改ゆを掌り。武家の
棟梁ふくおたまはせば。他こしき所動静こそ大ゆ
の端ともなるべき事。容易ちんどふ仕ゆを卻し給ふ
縛。武家の本意とも思ひ給らじと。会着でぞを状
去ける。君公驚くと笑たせるひ。紙こそ形まぐふ
強めるり。活る烈強を言を軍い。某方なるで外ふい

おらじ。然なぐいまぐ芸云色を表て。光を親ざるふ似
る平。丈乗ハ天地純粋の元象を延て。性理雲昧の
後治ふ法る。幽悪邪穢の路を塞ぎ。風を移し。俗をか
へ。君臣和して上下契ひ。男女紛敦ふ系き。長幼順ふ軌
を。第と合せる変されば。万民徳化ふ感し。世を守
りて綱ぶ。慶留乗ふ返る。這縁故ふ先生乗を
立るの深。ふ声八吉津ふ応じ。鬼神感じ。道義治
る。その家君の踏組。天文生成し。地理長育を。微ふ
見神。見聖。をでふ人その徳の施を所を変る。斉
もそも平の儀表なり。今日ふして家の風を
操るも。昨日軍の刀を操るも。尚て換まる心なれ

び。虚と竊ふの仇いあらじ。予が知る天下の用ふおわて。化名ふ猪をまぞなくうん。然るものと伺軍の係叛のんと懐くんや。哭きふ在く畢きと親。強きをみて弱きと蔡を。汝ふ心と男し。念と怪ふおとと怠て。乐と偶く業と其じ。偶た卒の日と迫むる。世と快愉瞻仰をべしと。怨切ふ令らとしい。強ふ寛闊大度の器量。古往今来這君ふ。猪方ぞおしとおもおへり。号て巷ゑの性くるや。復ふして怠と母く。強ふしく業と欲を。或い窓中の疎。信理の雅と嗜ませふ。一時執筆の輩。ふ和ふ出として。硴砌の硴の字と志御しつ。倩ふ伺る扈浸ふ宕るくと。巷ゑくも

やくも殆志めされ。汝知らざや。硴砌の文字い弘こそ出けとく。ふ指とりて。幕ふ大ふと出セくふ。加縛ふ軍中ふして。ふ自奉出あじと。弦度呂家ふ縊ると。出失ちくふ出ふ時い。其所と墨ふて塗没め。その側へ出加くる俗ふして。巳持て往れとくそたくふ。弦度ふも出換じくるを獲る時い。却て紙者ふふ巳へて。号くて。秘義をとくや。現ふ閑達ふ在して。妖狐ふくくさ。遠出迫出の大ふ名。出仕するおとふ。ふ法てきをと留め。往者ふ英泊音仮孫経を進めく。答ふひとくるくぞおえし。囲碁象棊乳香ふ撲。その人くの好むをふ。異と碰して搭載ちくふ。或

い蒼丈二寸ほゐ。殘紋を説ふる繰。恰も泥洲の如く
ちゝめふ。浩る大機の武羽みく在座せどる。ゑ自己
を結ゝ給ふちと。罫くく涂くおもしまた。往昔木下
義吉みく阿八重君と。婚儀を結ぶ時へ。関む筴る
ほ茨莚麦ゝも。鶸の実魚ほ。元白酒の渇場ある。それ
さへ罠ほ乏しゝれば。ゝを探筍ほ盛移して。ぶゞえく
もへの学袁しつ。武の献剛せし始終。活出させゝふ
てへ。袁級亘鄰茨蠶浩合。時くぞ喫させる。ゑ一
時紹巴を呼て。我義白せんほ。汝ゝに七せよとおゐせ
つ。

わくやまほ紅禁ふゝゝけ呼罠

紹巴ときを糸らせく
ちゝもええぬ焼史のゝげ
浩て紹巴言状ちゝく浄白おもしゝろう趨ぞされさ
むらへゞも。罠い呼ゝぬものみく結ゝと。史言せば巷
屈下茗て罠ほ麦みくゝも。君渠と嶂せんと鍼せ
べ。ちどゝ嶂せば止べきゝと宣ひゝると。細川遥富
位産下ほ付候して。
武義郷や志のとつゝねて侍ゑほ罠ゝゝゝ呼虫
いゝ」と孫る古歌もさぶゝへべ。罠と呼と吟さる
も理ゝほ付ほさぶゝちべと言上る。屈下ゝとく笑
種ほ投ゝゝゑひ。然べゝそ罠も呼虫ゝと命せゝる素

遠古歌い蛙の声ありて鳴といふふいあるぎ。百の像
新い声くの虫も停止て呂蛙の黄より赤ゆる
物のなりをべ。新い孫さりしと遥秋ぐ頼智もて蛙
公の恩命と調合さてまりしも。最賢ふぞ言されさ
りと万に義入とく役交りる。時ふ天正十七年戊又
月冥白辰下秀吉公。熟く懐発さ面ふゆり。ぞく硯ふ
技楽六十條蛙の朴列と蛙内ふ振愛し。金弼紋宝
蛙ふ法さり。然いあをじも。是と羽て完しく廩庫ふ
積義さたい壁土ふ渥ざる屋源ふ齊し。宜く番通
法内ふ領祝へんふい如らぐとく番郎ふの大ふ名。
和ふの多女ふ性ぐひて。巨紋と湯ざり。名新和の

蹂黎と労慰べしと命令あり。厳結搾の恪大ある也。
裂乗の底中二町ぐ間ふ。蛙ふ積さる金紹と毛隙ちれ
まぐふ安排べされば。嵬如抵国ふ精舎と結ぶ毛者ぐ。
布金の遠古も。新と計ふ労鞏さり。湯る和の多数
と紀さば。

黄金二千枚白銀一万枚と　古之文結古丸
日　三千枚　日　二万枚　門大臣伝雄公に
日　三千枚　日　一万枚　巷臣大納言秀毛人
日　三千枚　日　一万枚　巷臣中納言秀次人
日　一千枚　日　一万枚　浮田宰相秀家人
毛利輝元上杉景勝

白銀壹万あと　前田利家へ渡ふ

ちをとして初端として金二十万七千あと。中務二人女房ふ人佐渡十三人ふ渡り。黄金三千あ銀一万あと大廳。金一万あと政所。金ふ千あと秀頼の母公へ渡る。その外い區くの分銀ふ百じ。六合八維渡る古と大槃黄金銀三十六万ふ千余あとぞ寄へくる。

検ふ分ふるき君ふく左きと。佐化を仰ぐ以者ぞ

ふりき。程者公のほ状紙をもてあること異まあべ

万者の書とも編成べきふ。拙筆まと恐るべき所ふ

らんうへ

絵本豊臣勲功記九編巻之十終

明治十四年六月十五日版權免許
同　十七年十二月　出版

編輯人　東京府平民　櫻澤堂山
出版人　大坂府平民　東京芝區櫻田備前町四番地　岡田茂兵衛
同　東區博労町四丁目十七番地　松村九兵衛
同　南區心齋橋筋壹丁目四十三番地
發賣人　東京府平民　山中市兵衛
同　東京芝區三島町九番地
同　東京京橋區南傳馬町二丁目十二番地　吉川半七